

牧羊ひろば



服部喜望教会 教会学校

私たち服部喜望教会の教会学校は、ご婦人の浅野先生、青年女性の岡野先生、牧師夫人の山下の3人で教師をしています。生徒は、普段は信徒子弟の子どもが3人。そのほかに時々顔を出してくれる子が1、2人程おります。教会員のお孫さん方も時々来てくれる子たちがあります。賛美は、アカペラですが、賛美の賜物をお持ちの青年の先生による綺麗な歌声に導かれ、色々な賛美で元気に主をほめたたえています。

主の恵みに守られ、イエスさまを愛し、子ども達を愛する先生方によって、この地においてずっと教会学校が続けられて来ました。

●子どもカフェ

服部の教会学校では、月に一回、「子どもカフェ」というのが開かれてきました。先生方がおにぎりを握り卵焼

きを焼いてくださったり、教会のご婦人が手作りお菓子を振舞ってくださったり。当日は、近くの公園に出向いて案内を配り、来てくれた子ども達とゲームやかみしばい、賛美をし、美味しいカフェタイムを楽しみます。

これは、教会学校に来る子達とお話していた際に、朝ごはんを食べていない子達がいる事を知った教会学校の先生方によって始められたイエスさまの愛の取り組みでした。

子どもカフェについて、ある教会学校の先生がよくこの聖書の言葉を思い起こして話しておられました。「イエスは彼らに言われた。『さあ来て、朝の食事をしなさい』(ヨハネ21・12)。復活されたイエスさまが、弟子たちのために朝ごはんを用意して浜辺で待っていてくださった、あの場面のことです。愛に満ちたイエスさまのそのお姿。本当にイエスさまはお優しいお方です、と。私たちもそのように、子どもたちにさせていたいただきたい。

「来月の子どもカフェは何をしましょう?!」と話し合う時、私たちは笑顔でした。そして、今度たこ焼きもクレープもホットケーキもやきそばもみんなのできるよう

にと、念願の子どもカフェ用の大きなホットプレートを購入しました。素敵！これなら一度にたくさん焼けて、これからずっと使えるね！ たくさんの子どもが来ても大丈夫だね。いっしょに作ったら楽しいね。そう話していた矢先、二〇二〇年春です。コロナの感染拡大、緊急事態宣言。

●窓辺の教会学校

「子どもたちが一人でも多く教会に来て、救われますように」いつだってそれが祈祷課題でしたのに。気楽に「教会に来てね」と言えなくなりました。四方八方の窓を開け放ち、椅子を離し、心配の拭えない中で教会学校を開きました。もちろん、子どもカフェも、毎



コロナ前の子どもカフェ

週のおやつタイムもお休み。そんな中、教師の三人で顔を合わせては「この中でも何かできないかな」と話していました。

そして、アドベントを迎えようとした頃、こんな提案がありました。

窓辺いっばいに、クリスマスの紙芝居を貼ろう。登下校の子どもたちはじめ、沢山の人が行き交うこの窓辺に。人を迎えられないなら、外に掲げよう。そしてクリスマスには、窓辺の前の小さな広場に子ども達を集めて、プレゼントを渡そう。お菓子とみことばの恵みのメッセージをいっばい詰め込もう！

そうして、クリスマスには、23人の子どもたちに福音のプレゼントを渡すことができました。その次の月には「靴屋のマルチン」。イースターにはイエスさまの十字架と復活の紙芝居を飾りました。立ち止まって読んでもらえるように、クイズコーナーを作ったり、足跡を地面に貼り付けて辿るようにしたりもしました。

後になって聞いたのが、先生方はかつてより、窓辺にみことばを掲げたい、とずっと考えておられたとのこと。その願いが、コロナの状況を通して開かれていったので

すね。この働きは、「窓辺の教会学校」と名づけられました。きつとこれからも、良い形で続けていき、子どもたちに福音を届ける手段となれると思います。

二〇二一年の春、また緊急事態宣言となり、教会は閉じられました。教会学校はオンラインで守ってきました。YouTubeの教会学校動画を見て、LINEのテレビ電話で分かち合いとお祈りをしています。

(山下 愛)



窓辺の教会学校



クリスマス

●U君の思い出

ここで、教会学校の浅野先生より、ある一人の男の子のについてのお話を紹介します。

ある日5年生くらいの男の子(U君)が両親に連れられて教会学校へ来ました。とても教育熱心な両親のようでした。一年くらい毎週欠かさず来ていました。ところがU君は全く話をしない子でした。子ども同士でも私た

ち教師とも一言も話さない子でした。何を考えているのか、楽しいのか、楽しくないのか、わかっているのか、いないのかもわかりません。

ある時、お話の後で「みんな目を閉じてください。神様を信じます」という人は、そっと手を上げて下さい」と言うと、なんとU君が誰よりも早く何のためらいもなくサツと手を上げたのです。この子は何を話しても聞いていない、わかっているかと思っていた私は本当にビックリしました。私こそ、何もわかっていなかったんだ。「U君ゴメンネ。」

U君のことを通して深く教えられました。見える外側だけでは心の中はわからない。決して見えないところで判断してはならないと。ある日突然、両親が



2020年 マスク姿での特別賛美と子ども祝福式

来られて、来週からは塾に行くので今日で最後です、と。それ以来U君は2度と来なくなってしまいました。

あれから30年近くが経ちましたが、今も毎朝U君のことを祈っています。私たちCS教師は、今日の前の子どもたちを愛すると同時に、かつて出会った子どもたちのごとも生涯祈り続けて行く使命があるように思います。

特に未信者の家庭の子どもたちは、もし私が祈るのを止めたら、もう誰も祈る者はいないだと思つくと、祈らないではいられません。

(浅野幸子)

●今までもこれからも

最後に、岡野先生のお証しをもってまとめとさせていただきます。

私がCS教師に導かれてまだ数年ですが、これまでもいろいろなことがありました。たくさんの子どもたちが招かれていた時もあれば、続けて来ていた子どもがどんどんいろいろな事情で離れていき、誰も来ない日曜日もありました。子どもたちそれぞれの家庭環境、バックグラウンドが複雑で、アプローチに悩むこともありまし

た。また、教会の事、神さまの事を知らない子どもたちを、初めての場所に誘うこと、住所を尋ねる難しさを以前よりも感じます。今は、社会の変化によって子どもを取り巻く環境が大きく変わったことに加え、コロナの影響もあります。しかし、それでも、たくさんの方の祈りと働きに支えられ、何よりも神さまの大きな導きにより、ここまで一度も閉めることなく教会学校を続ける事ができました。

一年に一度、教会学校に来れるか来れないかの子どもたちが、服部喜望に来ることを楽しみにしていたり、教会学校からのお便りを大切に残してくれているという話を耳にしました。それは、やはり神さまの力によるもので、私たちの想像を超えたところで、子どもたち一人一人をとらえてくださっているのだと思います。伝道者の書にあるように、神さまがなさる全てのことに時があり、一番良い時が用意されている事を信じています。今できること一つ一つを大切に、これからも歩んでいきたいと思えます。

(岡野優子)



いつものメンバーで記念撮影パシャ